

再認識派の自己認識論

川尻 洋平

0. 序論

本稿の目的は、ウトパラデーヴァ (ca. 925-975) 及びアピナヴァグプタ (ca. 975-1025) に代表される再認識派が、仏教論理学派の想起の自己認識をどのように批判したのかを検討し、その批判の意図を明らかにすることである。

再認識派によれば、アートマンは主宰神シヴァに他ならない。そのようなアートマンの存在論証の文脈の中で、主宰神シヴァが有する三つの認識能力の一つである想起を巡る議論は極めて重要な意義を有している¹。一方、アートマンの存在を認めない仏教論理学派にとっても、ディグナーガ (ca. 480-540) やダルマキールティ (ca. 600-660) が想起に基づいて知識の二相性及び自己認識性を確立しているように、想起は重要な役割を果たしている²。再認識派も仏教論理学派と同じく、知識の自己認識を認める。しかしながら、再認識派は、仏教論理学派の知識の自己認識の理論においては想起が過去の直接経験を対象とすると考えられている点を批判する。なぜなら、再認識派によれば、知識の自己認識の理論を奉ずるかぎり、知識にはその知識以外に認識されるべき対象はなく、知識を認識するのはその知識自身であるから³、想起が過去の直接

¹ 主宰神には、想起能力 (smṛtiśakti)、認識能力 (jñānaśakti)、排除能力 (apohanaśakti) という三つの能力がある。IPK1.3.7: na ced antaḥkṛtānantaviśvarūpo maheśvaraḥ / syād ekaś cidvapur jñānasmrtyapohanaśaktimān // (「もし [大主宰神が] 存在しないというならば [世間の人々の存立は滅してしまうだろう]。大主宰神は、<精神>を本質とするものであり、唯一者であり、内包化された無限の世界に他ならず、認識、想起、排除という能力を有するものである」)

² ディグナーガとダルマキールティによる知識の二相性及び自己認識性の確立について詳しくは戸崎 [1985] 及び Hattori [1968] を参照せよ。

³ See PV III 327: nānyo 'nubhāvyaś tenāsti tasya nānubhavo 'parah / tasyāpi tulyacodyatvāt svayam saiva prakāśate // (戸崎訳 [1985: 10-12] 「それゆえに、[知よりほかに] 別個に領納されるべき [対象] は存在しない。

経験を対象とすることは論理的にありえないからである。

1. 自己認識の問題点

1.1. 想起の対象

まずはじめに、仏教論理学派の見解では、過去に経験された壺を「あの壺」と思い起こす想起が何を対象としているのかを見てみよう。ディグナーガとダルマキールティによれば、想起の対象は過去の直接経験とその対象の二つである。ダルマキールティは、PV III 378において次のように述べる。

tac cānubhavavijñānam ubhayāṃśāvalambinā /
ekākāraviśeṣeṇa tajjñānenānubadhyate //

「また [対象を] 直接経験するかの知は一形象 (能取形象) より他 [に所取形象をもつもの] として、 [後の] 知 - [それは] 二分 (所取形象と能取形象) を所縁とする - によって従われる (認識される = 想起される)」 (戸崎訳参照 [1985: 63-64])

対象を直接経験する第一の知識は、能取形象と所取形象を有している。そして、想起を本質とする第二の知識によって、第一の知識が認識される時、第一の知識の能取形象と所取形象が、第二の知識の所取形象となる。したがって、仏教論理学派によれば、想起は、過去の直接経験の能取形象と所取形象を対象としているのである⁴。

[また] それ [= 知] を領納するのは他ではない。なぜならば同じように批難されるから。まさにそれは自ら現われる。[他によって現われるのではない]」) ダルマキールティの自己認識の理論について詳細は桂 [1969] を参照せよ。

⁴ 究極的には知識に所取形象、能取形象、認識の三者の区別はない。PV III 353: avibhāgo 'pi buddhyātmā viparyāsitadarśanaḥ / grāhyagrāhakaśamvittibhedavān iva lakṣyate // (戸崎訳 [1985: 40-41] 「知自体は [勝義には] 区分を持たない (= 一者である) が、誤った見解をもった者たちによって、あたかも所取 [形相]、能取 [形相]、認識という差別をもつかのようにはみられる」)

1.2. 想起における自己認識

ウトパラデーヴァは、知識が他の知識によって認識されえないという仏教論理学派の自己認識の理論に従うとき、想起が過去の直接経験を対象としえないことを指摘する。ウトパラデーヴァは、まずIPK1.3.1及びその自註において次のように述べる。

satyaṃ kiṃ tu smṛtijñānaṃ pūrvānubhavasamskrteḥ /
jātam apy ātmaniṣṭhaṃ tan nādyānubhavavedakam //

「[知識とアートマンの差異が否定されるということ]はその通りである⁵。しかしながら、想起という知識は、過去の直接経験に基づく潜在印象を通じて生じるとしても、その[想起という知識]は自己を対象とするもの(ātmaniṣṭha)⁶であって、以前の直接経験を知らしめるものではない」

IPKV: pūrvānubhavasamskāraprobodhajanmāpi smṛtir
ātmanātraniṣṭhatvāt svarūpasamvedikaiva na tu pūrvā-
nubhavāveśābhāvāt pūrvānubhūtārthavyavasthāpikā
ghaṭate //

「想起は、過去の直接経験に基づく潜在印象の覚醒から生じるとしても、自己のみを対象とするものであるから、妥当するのは、想起はまさに[想起]自体の本質を知らしめるものに他ならないということであって、過去に直接経験された対象を

⁵ 先行する第二日課では、アートマンとその属性である知識の差異を認める実在論者であるニヤーヤ学派やヴァイシェーシカ学派の見解が仏教徒によって否定される。アートマンを認めない仏教徒にとっては、アートマンとみなされるものは知識に他ならず、両者に差異はない。両者の差異を否定するという点において、アートマンを認める再認識派は仏教徒と見解を同じくするということが'satyam'という語によって示されているのである。IPV1.3.1: pūrvapakṣamadhyaṭ mayā tāvat bahu aṅgikartavyam iti satyam ity anena darśitam / (「『反対主張の中から、まずもって多く[の真実]を私は認めなければならない』ということが[カーリカー中の]'satyam'というこの[語]によって示されている」); Bhsk1.3.1: bahu—vyatirikta-jñānanirākaraṇādikam vastujātam (「'bahu'『多くのこと』すなわち知識が[アートマンと]異なることの否定などといった一群の内容」)

⁶ 文字通りには、「自己に拠る所を有するもの」という意味である。アピナヴァグプタは、IPVVにおいて'smṛtijñānam'以下の構文解釈を提示し、そこで'ātmaniṣṭha'を分析している。IPVV I, p. 209: smṛtirūpaṃ jñānaṃ pūrvānubhavasamskārat yady api jātam, tathāpi ātmani svarūpe niṣṭhā viśrāntir yasya tādrśam, na tu ādyasya anubhavasya jñāpakam tat bhavati / (「想起という知識は、過去の直接経験に基づく潜在印象を通じて生じるとしても、自己(ātman=svarūpa)に拠る所(niṣṭhā=viśrānti)を有するそのようなものであって、それは以前の直接経験を知らしめるものではない」)

確立せしめるものであるということではない。なぜなら[想起は]過去の直接経験と一体化すること(āveśa)はないからである」

ウトパラデーヴァによれば、想起は想起それ自体だけを対象とするものである。つまり、想起は想起だけを知らしめるものであって、過去の直接経験を知らしめるものではない。アピナヴァグプタは、想起が自己を対象とするものである、ということをおのづかのように言い換える。

IPV1.3.1: ātmaniṣṭhe svaprakāśajñāne viṣayasyeva anubhavasya prācyasya aprakāśāt //

「[想起は]、自己を対象とするものであり、自照する知識(svaprakāśajñāna)である。このような場合、[過去の直接経験の]対象[を光照する]ようには、以前の直接経験を光照しないからである」

アピナヴァグプタによれば、「想起は自己を対象とするものである」という言明によって、想起は想起自身を知らしめるという意味で、想起が自照する知識であることが示されている。想起が自照する知識である場合、再認識派によれば、想起が過去の直接経験を光照することはない。一方、仏教論理学派によれば、すでに見たように、想起の対象は過去の直接経験とその対象の二つである。両派は、想起が過去の直接経験の対象を対象とするという点では、意見を同じくするが、想起が過去の直接経験を対象とするか否かという点では、意見を異にする。

ここでウトパラデーヴァが問題にしているのは、仏教論理学派が主張する、想起が過去の直接経験を対象とするということである。このことが不合理であることを、ウトパラデーヴァは知識の自己認識の理論を前提に、IPK1.3.2及びその自註において次のように述べる。

dr̥k svābhāsaiva nānyena vedyā rūpadr̥śeva dr̥k /
rase saṃskārajatve⁷ tu tattulyatvaṃ⁸ na tadgatiḥ //

⁷ IPV(a); IPV(b), IPK: saṃskārajatvam;

なおバースカラは、'saṃskārajatve'という読みを採用しているが、'saṃskārajatvam'という異読も提示している。これを採用すれば、「しかし、[想起が]潜在印象から生じるとすることは、それ[過去の直接経験]との類似性はあるが、それ[過去の直接経験]の把握はなく、それ[過去の直接経験との類似性]の把握もないということである」となる。Bhsk1.3.2: etena saṃskārajatve iti nimittasaptamīti dyotitam / atha vā saṃskārajatve ity asya sthāne saṃskārajatvam iti pāṭhaḥ / (「【第一解釈】これによって[カーリカー

「知識は、自己顕現するもの (svābhāsa) に他ならず、他 [の知識] によって認識されえない。ちょうど色の知識によって味に関する知識が知られないように。[想起には] 潜在印象から生じることを根拠として、その [過去の直接経験] との類似性はある。しかし、[想起には] その [過去の直接経験の] 把握はなく、その [過去の直接経験との類似性の] 把握もない (tadgati) ⁹」

IPKV: sarvā hi jñaptiḥ svasaṃvedanaikarūpānanyasaṃvidvedyā, rūparasajñānāyor anyonyavedane 'nyonya-
viṣayavedanam api syāt tataś ca indriyanīyamābhāvaḥ /
pūrvānubhavasamkārajatvena tatsādṛśyamātram na tu
pūrvānubhāvavagatiḥ, tadabhāvāt tatsādṛśyam api nāva-
seyam //

「なぜなら、あらゆる知識は自己認識のみを本質とし (svasaṃvedanaikarūpa) ¹⁰、他 [の知識] によっ

中の] 'saṃskārajatve' という [語] が、根拠を意味する第七格 (nimittasaptamī) であることが標示されている。【第二解釈】あるいはまた、'saṃskārajatve' というこの [語] の代わりに 'saṃskārajatva' という異読がある」)

⁸ パースカラによれば、'tu tattulyatvam' の代わりに 'tattulyatvena' という異読がある。Bhsk1.3.2: tattulyatvena iti pāthe sūtre anukto [']pi tuśabdah yuktatvenādhyāhāryah / (「'tattulyatvena' という異読の場合には、ストラでは述べられていないとしても 'tu' という語が結びつくものとして補足されるべきである」)

⁹ IPKV 及び IPV によれば、'tadgati' は二度読みされるべきである。その場合、'tad' は「直接経験」(anubhava) と「類似性」(tulyatva, sādrśya) を指示する。これら二つの読みのうち、前者は後者の原因となっている。IPVV I, p. 214: 'na tadgatiḥ' ity atra dvāv arthau tacchabdena anubhavasya sādrśyasya ca parāmarśāt / tatra prathamārtho dvitīyasmin hetutvena mantavyah / (「'na tadgatiḥ' というこの [表現] には、二つの意味がある。なぜなら 'tad' という語によって 'anubhava' と 'sādrśya' とが反省把握されるから。その内、最初の意味は第二 [の意味] に対する根拠として考えられるべきである」)

¹⁰ 再認識派の体系では、自己認識は精神的なものの本質であって、非精神的なもの本質ではない。そして彼らの体系では、楽 (sukha) などは非精神的なものである。したがって、楽には自己認識という本質はない。IPVV I, p. 215: ekasya ca tasyaiva ajaḍasya rūpam, na jādasya / (「そして [自己認識は] 唯その精神的なものだけの本質であって、非精神的なもの本質ではない」) この点は、楽などは自らが自らを認識するものである、すなわち楽などの自己認識を説くダルマキールティの見解と異なる。楽などの自己認識は、PV III 249-280 に説かれる。戸崎 [1979:347-376] を参照せよ。

当該の複合語は、アビナヴァグプタによって 'svasaṃvedanam ekaṃ rūpaṃ yasya' と分析される。IPVV I, p. 215: svasaṃvedanam ekaṃ rūpaṃ yasya iti tīkāro 'sya sūtrasya śaṅkitaparamatanīrasanahetutām hiśabdena dyotayati / (「自己認識のみを本質とするもの、というように注釈者は、このストラが懸念される他者の見

て認識されえないからである。色 [の知識] と味の知識とが相互に認識しあうとすれば、互いに相互の対象を認識しあうこともあることになるであろう。そして、それゆえ、感官の制限がなくなってしまうであろう。[想起には] 過去の直接経験に基づく潜在印象から生じることから、その [過去の直接経験] との類似性だけがある。しかし、[想起に] 過去の直接経験の把握はない。その [過去の直接経験の把握] がないから、その [過去の直接経験] との類似性もまた確定されえない」

ここで注目されるべきは、「知識が自己顕現するもの (svābhāsa) に他ならない」と述べられている点である。ここで用いられている 'svābhāsa' という語については後に検討するので、ここでは、自註において、ウトパラデーヴァが、あらゆる知識は自己認識のみを本質とするものである、と述べていることを確認したい。これは仏教論理学派の基本的主張にしたがったものであり、再認識派もその点に異論はない。そして想起も、知識に他ならないという点で、自己認識を本質とするものである。したがって、知識は他の知識によって認識されえないということ厳密に適用すれば、過去の直接経験は想起によって認識されえない、言い換えれば想起に過去の直接経験は現われえないということになる。仏教論理学派が知識の自己認識を主張し、かつ想起が過去の直接経験を対象としていると主張することは、矛盾しているのである¹¹。

解を否定する根拠であることを 'hi' という語によって標示している」)

¹¹ ウトパラデーヴァによれば、仏教論理学派はこの矛盾を回避するためには、断定 (adhyavasāya) 概念を導入せざるをえない。想起において過去の直接経験とその対象が対象であるということは、想起の対象ではない過去の直接経験とその対象が、想起の対象として断定されるからである。IPK1.3.3: athātdviṣayatve 'pi smṛtes tadavasāyataḥ / drṣṭāmbanātā bhṛāntīyā tad etad asamañjasam // (「[反論: 仏教徒] 想起は、それら [直接経験と直接経験の対象] を対象としないとしても、それら両者を [対象として] 断定するから、錯誤知に基づいて、すでに経験されたものを認識対象 (ālambana) としている。【答論: 再認識派] まさにこのことは、正しくない」) この反論は、ダルマキールティの次の言明と対応するであろう。PVin II 2,8-10: rang gi snang ba don med pa la don du mngon par shen nas 'jug pa'i phyir (svapratibhāse 'narthe 'rthādhyavasāyena pravṛtteh) (「[実際には] 対象ではない [知] 自身の顕現を [実際の] 対象として断定することによってひとは活動を起こすから」) 再認識派によれば、仏教論理学派の断定理論は日常活動を根拠づけることはできない。詳細につ

1.3. 再認識派の自己認識

次に再認識派が知識の自己認識をどのようなものと捉えていたかを検討しよう。ウトパラデーヴァは、‘dṛk svābhāsaiva’（「知識は自己顕現するものに他ならない」）という言明において、‘svābhāsa’を自己認識を意味するものとして注釈した¹²。アピナヴァグプタはこの‘svābhāsa’という語を次のように二通りに解釈する。

IPV1.3.2: ābhāsaḥ prakāśamānatā sā svaṃ rūpam avyābhicāri yasyāḥ, svasya ca ābhāsanam rūpam yasyāḥ /

「【‘svābhāsa’の第一解釈：{ābhāsaḥ svarūpam yasyāḥ}】【‘svābhāsa’は、バフヴリーヒで】顕現（ābhāsa）を固有（sva）の本質（rūpa）とする【知識、という意味である】。【顕現とは、】現に光照していることであり、【固有の本質とは、】逸脱しない性質【という意味】である。

【‘svābhāsa’の第二解釈：{svasya ābhāsanam rūpam yasyāḥ}】あるいは【‘svābhāsa’は、異格表現によるバフヴリーヒで】自己を（svasya）顕現せしめる（ābhāsa）という本質を有する【知識、という意味である】」

まず第一解釈によれば、‘svābhāsa’は意味的に‘ābhāsasvarūpa’と等しいものとしてGen.Bv.で解釈され、「顕現を固有の本質とする知識」という意味である。そして「現に光照していること」については川尻[2004]をみよ。

¹² ディグナーガは、唯識説の立場から、認識結果として自己認識を導入するとき、この‘svābhāsa’という語を使用する。ディグナーガはPS 19a及びその自註において次のように述べる。「あるいはこの場合、自己認識が結果である。実に知識は二つの顕現を伴って生じる。【すなわち】自らの顕現（svābhāsa）と対象の顕現（viśayābhāsa）とである。それら二つの顕現を伴った知識の自己認識が結果である」（svasamvittih phalam vātra dvyābhāsam hi jñānam utpadyate svābhāsam viśayābhāsam ca / tasyobhayābhāśasya vijñānasya yat svasamvedanam tat phalam /）（テキストはHattori [1968]）ここでは、‘svābhāsa’という語は能取形象を意味するものとして使用されている。再認識派においても、この語は能取形象としても解釈される場合もある。その場合、「自己として顕現している顕現」と解釈される。この場合、自己とは知識自身ではなく、認識主体自身を指している。IPV2.3.1: svatvena ābhāsamāno ya ābhāso navanavaprāmeyaunmukhyāt navanavodayaḥ sa pramānam yataḥ pramānam vidhatte /（「自己として顕現している顕現、【その顕現は】常に新しい認識対象に直面しているから常に新しく生じている、それが認識手段である。なぜなら、認識をもたらずから」）；IPKV2.3.1: pramātau svatvenāpūrvavastvabhāsaḥ（「認識主体自身として【顕現している】新しい事物の顕現」）

（prakāśamānatā）とは、注釈者バースカラ（18世紀頃）によれば「外界と関係する光照の行為主体であること」（bāhyasambandhiprakāśakartṛtva）を意味し、顕現とは、外界を光照していることである¹³。第一解釈の意味するところは、知識には、外界光照者性という知識固有の本質がある、ということである¹⁴。

次に第二解釈によれば、‘svābhāsa’は異格表現によるBv.で解釈され、「自己を顕現せしめるという本質を有するもの」という意味である。第二解釈の意味するところは、知識には、知識自身を顕現せしめるという本質、すなわち知識自身を光照するという本質がある、ということである¹⁵。

この二つの解釈を結びつけて、アピナヴァグプタは知識の自照性について次のように述べる。

IPV1.3.2: paraprakāśanātmakanijarūpaprakāśanam eva hi svaprakāśatvam jñānasya bhāṣyate /

「他を光照することという【知識】自身の本質（nījarūpa）を光照すること（prakāśana）こそが、知識の自照性【という本質である】といわれるからである」

知識の自照性とは、知識自身の本質を光照することであり、その知識自身の本質とは対象を光照することである。知識は、知識自身を光照し、対象も光照するという見解は、仏教論理学派の自己認識の理論の基本的枠組みを外れるものではない。再認識派は、その基本的枠組みにおいて、仏教論理学派と共通の立場にあると言える。

¹³ Bhsk1.3.2: prakāśamānatā—bāhyasambandhiprakāśakartṛtva（「‘prakāśamānatā’『現に光照していること』、すなわち外界と関係する光照の行為主体であること」）

¹⁴ バースカラによれば、この第一解釈によって光照するもの（prakāśaka）という知識の本質が語られている。Bhsk1.3.2: etena prakāśakākhyam apyā svarūpam uktam /（「この【‘svābhāsa’という語の第一解釈】によって、この【知識の】光照するもの（prakāśaka）という本質が述べられている」）

¹⁵ バースカラによれば、この第二解釈によって自照するもの（svaprakāśaka）という知識のもう一つの本質が語られている。Bhsk1.3.2: atha vaiyadhikarāṇyena bahuvrīhim āśrītya svaprakāśakākhyam apyā svarūpam kathayati svasya ca iti /（「あるいは、異格表現によるバフヴリーヒに依拠して、自照するもの（svaprakāśaka）ともいわれるこの【知識の】性質を‘svasya ca’で説明する」）

2. 再認識派の見解

自己認識の理論の基本的枠組において、壺を想起するとき、「あの壺」と同時に「壺を直接経験した」ということも想起する。しかし、再認識派は、厳密に言えば、想起が過去の直接経験を対象としえないことを指摘した。それでは、「壺を直接経験した」という形の過去の直接経験は想起時にどのように現われるのであろうか。

再認識派において、認識主体は光照を本質とするものであり、知識を本質とするものである。認識主体と知識は別個に存在することはない。このことをアピナヴァグプタは、次のように述べる。

IPV1.1.4: aham jānāmi, mayā jñātaṃ jñāsyate ca ity evaṃ svaprakāśāhaṃparāmarśapariniṣṭhitam¹⁶ eva idaṃ jñānaṃ nāma,

「ここで知識と呼ばれるものは、『私は認識する』『私は認識した』『私は認識するだろう』というこの様な仕方、自照する『私』という反省的意識 (ahamparāmarśa) に依拠する [知識] に他ならない」

知識には必ず「私」という反省的意識が付随し、知識が認識主体を離れて別個に存在することはない。そして「私」という反省的意識は、自照するものである。「私」という反省的意識は、それ自体を把握するとき、他の何かしらのものを必要としない。知識の自照性は、知識が自照する「私」という反省的意識に依拠していることに基づいているのである¹⁷。したがって、想起時に、過去の直接経験が想起の対象として現われることはない。過去の直接経験は「私」という反省的意識と別個には存在しないから、「私は直接経験した」という形で現われるのである。

3. 「外向」と「内向」

再認識派と仏教論理学派は、知識と別個に存在しない認識主体の本質であるアートマンを認

¹⁶ IPV(a); IPV(b): ity evaṃ prakāśāhaṃparāmarśapariniṣṭhitam;

¹⁷ Bhsk1.1.4: tathā cāhaṃparāmarśavat svaprakāśatvarūpam svataḥsiddhatvam asya sphuṭam eveti bhāvaḥ / (「そして、そのような場合、『私』という反省的意識と同様、自照性という形の自ずから確立される性質が、これ [認識] にあることは、全く明瞭である、という意である」)

めるか否かにおいて立場を異にする。この両派の見解の差異は‘antarmukha’（「内に向かうもの」）という語の解釈に現われる。ダルマキールティはPV III 427において次のように述べる。

bahirmukhaṃ ca tajjñānaṃ bhāty arthapratibhāsavat /
buddheś ca grāhikā buddhir nityam antarmukhātmani //
「また、対象顕現 (=対象形相) を持ったかの知は、外に向って現れる。しかし、知を把握する知は常に自身において内に向って現れる」 (戸崎訳参照[1985: 108-109])

ダルマキールティによれば、外向きに現われるものは対象を把握する知識であり、内向きに現われるものは知識を把握する知識である。

これに対して、再認識派においては、外向きに現われるものは、「これ」という形の対象を把握する知識であり¹⁸、内向きに現われるものは「私」という形の知識である¹⁹。アピナヴァグプタは、次のように述べる。

IPV1.4.1: pūrvam anubhūtasya arthasya ya upalabdha antarmukho bodhaḥ sa tāvat adyāpi parataḥ smṛtikāle ‘pi asty eva, saṃvinmātrasvarūpasya kālakṛtasāṅkocarpaviśeṣātmakāvacchedāyogāt²⁰ /

「過去に直接経験された対象の、内向的な意識としての知覚者、それは、まずもって今も、後 [にも]、すなわち想起の時に必ず存在する。なぜなら、認識のみを本質とするものは、時間に基づく制限作用を本質とする差異化に他ならない限定作用と結びつかないから」

ここで言及されている知覚主体は、内向的な意識を本質とするものである。その内向的な意識とは、「私」という反省的意識である。そして、

¹⁸ Bhsk1.2.1-2: bahirmukhīnasvarūpadhārīṇi, idaṃ iti bāhyasaṃmukhe pramānarūpe iti yāvat / (「‘bahirmukhīnasvarūpadhārī’『外向きの本質を保持する [認識]』、要するに『これ』と [いう形で把握する] 外界に直面している (bāhyasaṃmukha) 認識手段を本質とする [認識]」); Bhsk1.3.7: bahirmukhatvam—idaṃ iti grahaṇarūpam bahirbhāvam (「‘bahirmukhatvam’『外向性』、すなわち『これ』という把握を本質とする外在性」)

¹⁹ Bhsk1.2.1-2: antarmukham—pramātrāsāmmukhyena sthitam (「‘antarmukha’『内向きの [光照]』、すなわち認識主体に直面するものとして (pramātrāsāmmukhya) として存立する [光照]」); Bhsk1.4.1: antarmukhaḥ—aham iti sthitah (「‘antarmukha’『内向的な [意識]』、すなわち『私』というように存立する [意識]」)

²⁰ IPV(a); IPV(b): kālakṛtasāṅkocarpaviśeṣātmakāvacchedāyogāt;

それは時間によって限定されることのないものであるから、恒常なる知覚主体として、過去の直接経験時にも現在の想起時にも存立し続けている。認識主体の本質であるアートマンを認め、それが知識とは別個に存在しないことを認めるとき、想起において過去の直接経験が「これは過去の直接経験である」というように想起の対象として現われることはなく、「私は直接経験した」というように過去の直接経験は内向的な意識である「私」という反省的意識と不可離のものとして現われるのである。

4. 結論

仏教論理学派と同じく自己認識を認める再認識派は、自己認識の理論を厳密に適用すれば、想起に過去の直接経験は現われえないことを指摘した。アートマンを認識主体の本質として認める再認識派は、アートマンと知識が異なることを根拠にして、想起に過去の直接経験が現われるということを正当化しうる。想起時において過去の直接経験は認識主体と不可分のものとして現われているのであって、想起の対象として現われているのではない。再認識派が仏教論理学派の想起の自己認識を批判した目的は、想起の自己認識を否定することではなく、仏教論理学派の基本的教義である無我説を批判することにあった。仏教論理学派は、無我説に立つ限り、自己認識理論の理論的根拠である想起に、過去の直接経験が現われるということを正当化しえないのである。知識の自照性は、自照するアートマンに依拠しているのである。

参考文献及び略号

- Bhsk: Bhāskarakaṇṭha's *Bhāskarī*. See Iyer and Pandey.
Hattori, Masaaki
1968 *Dignāga, On perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamuccaya from the Sanskrit fragments and the Tibetan versions.* Harvard Oriental Series 47. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- IPK: *Īśvarapratyabhijñānākārikā*. See Torella.
IPKV: *Īśvarapratyabhijñānākārikāvṛtti*. See Torella.
IPV(a): *Īśvarapratyabhijñāvimarsinī*. See Iyer and Pandey.
IPV(b): *Īśvarapratyabhijñāvimarsinī*. See Rāma Shāstri.
IPVV: *Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarsinī*. See Kaul Shāstri.

- Iyer, K. A. S. and Pandey, K.C.
1938-50 *Īśvarapratyabhijñāvimarsinī of Abhinavagupta.* The Princess of Wales Sarasvati Bhavana Series, 70, 83. Allahabad. [Reprinted 1986: Delhi: Motilal Banarsidass].
- Kaul Shāstri, Madhusudan
1938-43 *Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarsinī of Abhinavagupta.* Kashmir Series of Texts and Studies 60, 62, 65. Bombay: Nirṇaya Sagar Press.
- PS I: *Pramāṇasamuccaya*, chapter 1 (Pratyakṣa). See Hattori.
PV III: *Pramāṇavārttika*, chapter 3 (Pratyakṣa). See 戸崎.
PVin II: *Pramāṇaviniścaya*, chapter 2 (Svārthānumāna). See Steinkellner.
- Rāma Shāstri, Mukunda.
1918-21 *Īśvarapratyabhijñāvimarsinī of Abhinavagupta.* Kashmir Series of Texts and Studies, 22, 33. Bombay: Nirṇaya Sagar Press.
- Steinkellner, Ernst
1973 *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, zweites Kapitel: Svārthānumānam, Teil I, tibetischer Text und Sanskrittexte.* Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Torella, Raffaele
1994 *The Īśvarapratyabhijñānākārikā of Utpaladeva with the author's vṛtti, critical edition and annotated translation.* Serie Orientale Roma 71. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- 桂 紹隆
1969 「ダルマキールティの自己認識の理論」『南都仏教』第23号, pp. 1-44.
- 川尻 洋平
2004 「再認識派の無我論批判」『哲学』第56集, pp. 133-145.
- 戸崎 宏正
1979 『仏教認識論の研究』上巻 大東出版社 東京
1985 『仏教認識論の研究』下巻 大東出版社 東京

(かわじり ようへい, 広島大学大学院

[インド哲学])